



Title	デューイの習慣概念
Author(s)	小林, さや香
Citation	大阪大学教育学年報. 2003, 8, p. 99-108
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7802
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デューイの習慣概念

小 林 さや香

【要旨】

デューイは、「習慣」という概念を人間性の基本的な説明原理であると考え、デューイにおいて習慣概念は、精神的活動と身体的活動との相互作用、そして人間と環境との相互作用によって説明される。習慣は、単なる反復や順応にとどまらない。習慣の再構築の過程で、環境を適応的に調整すると同時に、各個人の独自性が発揮され、新たな行動が創出されるものである。常に再構築の過程にある習慣は、一般的には対立するとされる概念を相補的にとらえることを可能にし、内と外、精神と身体といった二項対立を乗り越える契機となる。

このような習慣概念を基底とするデューイの中道的自然主義は、自由意志論と決定論、そして絶対主義と相対主義という伝統的な対立を調停し、新しい世界観を切り拓く。そうした世界観においては、人間は常に連続的循環の中に在り、そのことによって自由と成長が保障される。

これまでデューイの自由観や成長観は、相対主義的で目的を持ち得ず、理想を追求し得ないという批判にさらされてきた。しかし、彼の習慣概念を基底とする自由観、成長観は、二項対立を調停するのみならず、こうした批判にも答えるものである。

1. デューイの習慣概念

古来から人間について考える学には、常に二つの学派があった。ひとつは生まれつきの人間性を強調する学派であり、もうひとつは、社会環境の影響に依存する学派である。前者は、人間の行為はその人が生まれつき持ち、育ててきた性向や良心や理性に依存していると考え、後者は、人間の行為を社会環境の影響によって生み出されたものとする。しかしデューイの習慣論は、両者をつなぐものである。人間のあり方は、その人固有の人間性と、社会的環境の相互作用によって形成されていくと考えるのである。

(1) 習慣とは何か

デューイ(J.Dewey 米 1859-1952)は『人間性と行為』(1922)¹⁾の中で、人間の営みにおける「習慣」(habits)の重要性について述べている。以下では、デューイの論に従って、習慣についてまとめてみたい。

デューイは「習慣」という概念を、社会心理学の鍵となる概念であると考え。「人間は理性の生き物でもなく、本能の生き物でもない。人間は習慣の生き物である」(HNC,p.88)とデューイが述べるように、「習慣」は人間性(human nature)の基本的な説明原理である。

デューイのいう習慣は、先行する活動によって影響を受け、その意味で後天的に獲得された人間活動全般を指している。その中では、行動の諸要素は秩序づけられ体系化されている。この人間活動は、たとえば活動として顕在化してないときでも、態度とでも呼ぶべき抑制された形態で作動するものである。たとえば歩くという習慣は、人がじっとしているときにも表現されている。事物を認識する際に、歩いて何分の距離であるとか、手を伸ばして届く距離であるとかいった判断がなされていることが、その明白な証拠とみなされる(HNC,p.39)。

身体的機能のみならず、精神的機能の形成も習慣に依存している。観念も意志も感覚も、自然発生的に生み出されるものではない。以前の習慣からまったく影響を受けない純粋な理性というのは幻想であるし、習慣から分離した純粋感覚というのも同じく幻想である。思考と意図の素材である感覚と観念は、それを生み出す行動の中にあらわれる習慣から等しく影響を受けている。明確な感覚を持つということは、それが最も原始的と思われるような感覚であっても、訓練、熟練、習慣の賜物なのである。

習慣という媒介物によって我々はじめて知覚し、観念を持ち、思考することができる。知覚における錯覚についての心理学が示す例は、知覚がどれほど習慣に依存しているのかを明らかにしている。習慣という媒介物は、我々の知覚と思考に到達するすべての材料を濾過するのである。しかしこの濾過は、化学

実験の場合のように純粋なものではない。新しい性質を加え、再配合する働きもする。観念も感覚も、経験に依存する。この経験は、習慣の作用なのである。こうして、行動に関する我々の目的と命令は、身体的ならびに道徳的習慣という媒介物の屈折作用を通して我々のもとに到達するのである。

以上のように、あらゆる顕在的、潜在的活動は、先行する活動によって影響を受けている。したがって、人間のあらゆる精神的、身体的営みは習慣であり、人間は習慣であるとさえ言える。

デューイは習慣を、自我、性格、意志、技術、手段、態度など様々な言葉で言い換える。人間が数々の習慣を統合したものであることを考えれば習慣は自我であるし、習慣の相互浸透によってその人の性向が作られることに着目すれば、習慣は性格である。また、習慣が偏愛や嫌悪に代表されるような、ある種の刺激に対する特別な敏感さや接近を意味することに着目すれば、習慣は意志である。しかし、習慣を目的達成のために働く機能として考えるならばそれは技術や手段と言えるし、実際の活動として顕在していないときにも習慣が作動していることを考えれば、それは態度と言えるのである。

「習慣」という言葉は反復的活動を連想させるかもしれない。しかしデューイのいう習慣は、単なる反復行為や順応とは異なる、環境の「活動的調整」のプロセスである(DE, pp.51-52)²⁾。もちろん反復という傾向は多くの習慣に付随するものだが、生涯で一度しか起きない行動であっても、それはやはり習慣によるものである。習慣の本質は、特殊な行動の反復にあるのではなく、後天的に得られた反応の様式にある。しかも、それが生きた様式であるということが重要なのである。

(2) 習慣の再構築のメカニズム

習慣は、有機体の個体レベルでは環境への反応様式であり、組織的レベルでは社会の慣習を意味する。後者は「共通の精神、共通の感じ方、信じ方、目的志向の仕方」であり(HNC, p.45)、そのうちに生命が誕生し、成長し、同時にその新しい生命によって修正が施されていくような「生活様式」(form of life)である(HNC, p.66)。この二つのレベルの相互作用が、デューイの述べる「習慣の再構築」(habit reconstruction)のメカニズムである。ここで彼が示唆する変化のイメージは、斬新な革命や破壊とは異なり、文化の内側から生み出される漸進的な変容である。

習慣の再構築には二つの関連し合う機能がある。衝動(impulse)と知性(intelligence)である。衝動は、有機体が生まれながらに備える傾向性であり、古き慣習の殻を破る新奇さの萌芽である。これをデューイは「精神における個性の始まり」と呼ぶ(HNC, p.62)。しかしこの新奇さは始まりにすぎない。世界に誕生するやいなや、それは既存の諸習慣の影響のもとに組み込まれてゆくからである。衝動は、時間的には初めにありつつも、外界の諸習慣との相互作用の中で、後から獲得されてゆく新しさであるというパラドシカルな性質を負っている。ここに知性の機能が介在してくる。知性は観察、判断、想起、予測等の反省的機能を司り、獲得されゆく新奇さとしての衝動の動きを方向付けてゆくのである。

こうした一連のプロセスの中で、有機体が生み出す固有の衝動は客観的に具体化されてゆく。すなわち、外的環境に組み込まれることで、単なる無軌道な逸脱とは異なる、ある種の中立性を備えた個性を獲得してゆくのである。

以上のような習慣の再構築のメカニズムが、変化と成長に基盤を置くデューイの自然主義の内実なのである。

(3) 内と外の間項としての衝動

デューイの自然主義的な習慣の再構築概念は、西欧近代哲学史、心理学史において独自の位置付けをもつ。この概念は、デカルト的合理主義とイギリス経験論が生み出した「個別の精神」(the individual mind)という概念、すなわち外界のマトリックスから切り離された内的意識と、その内的意識に対するフロイト心理学的内省へのアンチテーゼでもある。

こうした内的意識に代わり、いわばもうひとつの「内」的概念としてデューイが提示するのが、衝動の概念であると考えられる。彼によれば衝動は、「情動的感受性」(HNC, p.137)、「情動のより深くより原初的な反応」(CC, p.136)であり、独自の偏向性、嗜好性として個別の有機体の内側から生み出される行為の

推進力、活力の源である。

しかしながら、衝動は閉ざされ遮断された秘境としての内面にとどまるものではない。それは、外的環境との相互作用を通じて、行為の「傾向性」として、外界に顕現するものである。そしてこの行為の傾向性を予測し、その結果に照らして現在の行為の意味を判断し、更なる行為をガイドしてゆくことが、衝動の方向付けという知性の機能である。この側面においてデューイは行動主義的であるが、それはスキナー(B.F.Skinner)やワトソン(J.B.Watson)らの還元主義的行動主義とは異なり、ミード(G.H.Mead)の社会的行動主義の流れに位置づくものである。

(4) 中道的世界観

このように、内的な衝動を脱中心化して外的状況に位置付け、またそれを固定したものではなく弛みなく改変されてゆく傾向性としてとらえなおすことによって、デューイは人間性を内でも外でもない両者の中間領域においてとらえる。そして、行為(action)と精神(soul)を分断しない、内と外の二元論を超える世界観を提示する(HNC,p.52)。それは、内か外か、精神か肉体か、主観か客観かという二項対立的思考からすれば、相容れない対立要素を折衷したどっちつかずの思想とも受け止められよう。

しかしこうしたデューイの思考様式は、「あれかこれか」(Either-Ors)の二者択一思考ではなく、その「中間」(intermediate)という新しい第三の選択肢を提示するものである(EE,p.17)³⁾。それは、固定された対立項の折衷ではなく、可変的要素間の相互作用が継続的に生み出してゆく「中間項」(HNC,p.51)においてしかとらえられないようなものであろう。こうした見方は、「我々はものごとの中間から出発する」というパースの言葉に象徴されるように、始まりと終わりを固定することなく、絶えず直中から始まり成長しつづけるという、プラグマティズム独自の世界観である。こうしたプラグマティズムの世界観において中間のイメージは、時間的、空間的に固定された真中の地点ではなく、行為と実践のダイナミックな過程としてとらえられるべきであらう。

人間の内的な自然に示されるデューイの中道的世界観は、一般には対立するとされる両極の要素を相補的にとらえるものである。デューイはこうした習慣概念を基底とする世界観によって、決定論と自由意志論との間の相克と、絶対主義と相対主義の間の相克を調停した。以下でそれぞれ見ていくことにする。

2. 決定論と自由意志論を調停するものとしての「習慣」

自由意志論(free will debate)とは、「人間は自由意志をもつか」という問いに関する議論であり、伝統的な難問のひとつとして今なお絶えることなく議論されている。自由意志について考える際に重要なのが、その対極に位置する決定論(determinism)である。決定論とは、「あらゆる事象は結果である」という説であり、あらゆる事象はそれに先行する何らかの事象によって強制されて生起することになる。これが人間の行為に適用されると、人間のあらゆる選択や行為は、必然的に引き起こされるような形で因果的に決定されているということになり、人間の自由意志は認められないことになる。

人間は自由意志をもつか、それとも、あらゆる事象は結果として定められているのか。もしも決定論が成り立つとするならば、人間の自由意志や道徳的責任についてどのような帰結が生じるのか。こうした難問に、デューイの習慣論が、調停の役割を果たすのである。

(1) デューイは「意志の自由」を認めるか

デューイは『人間性と行為』の第一部第二章「習慣と意志」(HNC,pp.25-41)で、「習慣は意志である」(HMC,p.41)と述べている。ここでデューイがいう習慣とは単なる過去の繰り返しではなく、過去の行為の影響を受けつつ、新たな行為を生み出していくダイナミックなものである。つまりデューイのいう習慣とは、過去の行為から影響された抑制的な形式に反して、過去とは違った新たな行動を起こすことのできる能力である。

ここから魚津は、デューイの習慣論が人間の意志の自由を認めるものであると考える。意志としての習

慣が、過去の影響を受けながらも決して単なる過去の繰り返しではなく、過去によって決定されたものではないということは、ある行為Aとは違った行為Bを選ぶことができるという意味での「意志の自由」を認めることである、と考えるのである⁴⁾。

しかし魚津は、この点を巡って南イリノイ大学デューイ研究センターのS.M.エイムズと対立を続ける。エイムズは魚津に対して、「デューイは『自由』を認めますが、『意志の自由』は認めていません」とし、『人間性と行為』第四部第三章「自由とは何か」を読み直すよう勧める旨の書簡を送っている。たしかにここまで見た限りでは、デューイのいう自由が「意志」に帰されるものなのかどうかは断定できないように思われる。

ここで、「意志の自由」について整理しておく必要がある。デューイは、ジョン・ロックから19世紀までの自由に関する思想の系譜を概観した後に、「自由とは選択そのものであるとする哲学と、自由とは選択にしたがって行為する能力であるとする哲学がある」と述べる⁵⁾。前者は、自由概念を「創始性」(originate)と呼ぶべきものに求める哲学であり、後者は、これを「随意性」(voluntary)と呼ぶべきものにも求める哲学である。

魚津は、「自由とは何か」から、デューイにおける自由概念の三つの特徴を挙げる。(HNC, pp.303-4)。その三つとは、デューイが①「行動の能力、諸々の計画を遂行する能力、束縛を妨害する障害のないこと」と述べるもの、②「計画を変更し、行動のコースを変え、新しい事柄を経験する能力を含む」と述べるもの、③「欲求や選択が出来事の要因となる能力」と述べるものである。①と②は随意性の方に、③は創始性の方に分類できるが、魚津はこの第三の自由を「選択の自由」と呼び、これこそがまさに意志の自由であるとしている。

(2) 過程としての自由

しかし、ここで思い出してほしい。デューイにおいて、意志とは習慣であった。つまり、デューイにおける「意志の自由」は、自らの意志に従って自由に選択し行動することができる、という主体に付与された特権的な性質ではない。自由は静止した存在の中にある性質ではなく、行動の発展的な過程の中に求められるものなのである(PF, pp.291-2)。

デューイのプラグマティズムは、知性に導かれた欲求、熟慮、選択にこそ、自由を求める。デューイは知的な選択によって行動の範囲が広がり、また広がることによって選択がさらに知的なものになるという広がりゆく循環こそが、自由の本質的な構造であると考え、「こうした観点からすれば、我々は自由を先行するものの中ではなく、来るべきものの中に、ある種の成長の中に、すなわち諸々の結果の中に、探し求めざるを得ない」と述べる(PF, p.291)。

デューイにおいて、過程の中に求められるという自由は、実は決定論とも親和性を持つように見える。この点に関しては、デューイにおける「必然性」の概念と「世界の非決定性」に関する議論を見てみる必要があるだろう。

(3) 「必然性」と決定論

デューイは、出来事と出来事の結びつきには「必然性」が認められるという。「そうした結びつきを知りさえすれば、私が望む諸観念を獲得する能力はそれだけ増大するであろう。ある選択が生じる諸条件を知るということは、選択の形成を知的に導く潜在能力に等しい」(PF, p.295)。このように知的に選択を形成し、新しい自我を作っていくことが自由の本質なのであるが、ここでいわれる「必然性による選択の形成」は、決定論と非常に近いものに見える。因果律によって定められた世界の諸条件を知的にコントロールすることは、コントロールという点では自由になじむが、因果律への適応という意味では決定論になじむ議論にも見えるのだ。

しかしデューイは「必然性」について以下のように述べる。「存在するものは、すべてそれ自体何か独自なものをもっている。そしてこの何か独自なものは、その存在の働きの中にあられる」。事物の独自

性あるいは個性とは、その事物の動きにおける「偏向(bias)、好み(preference)、選択性(selectivity)」であって、電子や原子でさえこうした「好み」を持っている。かくして「必然性」とは、ある事物の動きが生じたときに、それと他の諸事物の動きとの間に作られる「不変の関係」である。科学法則はこうした関係を「統計的に」示したものにすぎない。「あらゆる事物が、それ自体、自由であることを示さないにしても、反応に関して偏向や好みや選択性を示すという事実は、人間の持ついかなる自由にとっても不可欠の条件である」。つまり、素粒子でさえその反応に選択性を持っているのであるから、人間の行動において「選択の自由」が認められるのは当然なのである。それによって人間は、「必然性」を利用すると同時に従来とは違った行動とることができ、新しい自我へと成長していくことができるのである(PF, pp.293-294)。

こうしてみると、デューイの自由概念は創始性が随意性かという分類に当てはまるものではない。デューイにおいて自由は、知性によって必然性を利用しながら、そうすることによって行動の範囲が広がり、またそのことによって選択がさらに知的なものになるという広がりゆく循環のなかで成長を続ける、その過程そのものなのである。必然性は「不変の関係」としてあるが、そこには傾向性としての「選択の自由」が含まれている。したがって、必然性は世界を決定論で覆ってしまうようなものではない。

デューイにおいて世界は、決定的であると同時に非決定的である。1で述べたように、デューイは、一般には対立するとされる両極の要素の相補的な働きとして、世界をとらえている。このような世界観を持つデューイは、自然が安定と不確実の混合からなるとして、以下のように述べる。

我々は、一方においては、予測と統制を可能にするような充足状態、落ち度のない完結性、秩序、循環、他方においては、奇異さ、あいまいさ、不確実な可能性、いまだ非決定的結論に至るようなプロセスという、印象的で抗うことのできない混合状態としての世界に生存している……変化が永劫性に意味を与え、循環が新奇さを可能にする(EN, p.47)⁶⁾。

こうした混合状態からなる自然世界をデューイは、「自然的事象の全体性」や「広大な全体性」(HNCp.180)といった、全体性の感覚で捉える。世界は、安定性と不確実性の循環によって動いているのであり、そこにこそ自由の基盤がある。諸事物は「好み」としての選択性を持つと同時に、それによって必然性で結ばれてもいる。そうした選択性を持つことが可能になるのは、世界が非決定だからである。こうしてデューイは、自由意志論と決定論の間の問題を調停したのである。

3. 絶対主義と相対主義の中道を可能にするものとしての「習慣」

デューイの哲学は、ポストモダン以後を模索する試みの中で再び脚光を浴びつつあるが、しかし他方では、価値相対主義への懸念を抱く人々から、確たる目的や道徳的理想をもたない自由放任主義、モラル崩壊の元凶などとして批判されてもいる。

しかし1でも簡単に触れたようにデューイの哲学は、価値相対主義に陥ることなく、かといって絶対的価値を追い求める絶対主義に戻ることもなく、第三の道を模索するものである。そしてその際に鍵となるのが、人間性と環境との相互作用としての習慣概念なのである。

(1) 相対主義者デューイ?

デューイ批判においてとりわけ論議の争点となるのは、彼の教育哲学の中心的テーゼともいえる、「成長は生の特質であるゆえに、教育は成長することと同義であり、それ以上の目的をもたない」(DE, p.51)という思想、すなわち成長のための成長という概念である。成長とは成長のプロセスの外に目的を持つこと(having an end)ではなく、目的そのものである(being an end)(DE, p.55)。よって、さらなる成長(more growth)を生み出し続け、経験を果てしなく再構築し続けること自体が教育の目的となる。

こうした成長のための成長概念には、常に批判が向けられてきた。成長すること以外に規定力を持たないプラグマティズムは、教育の、そして民主主義の指針とはならず、アメリカ社会にニヒリズムと反知

性主義を培養する結果となったなどという批判である。こうした批判は現代にも引き継がれ、道徳的諸徳と根源的原則を持たないデューイのプラグマティズムは、文化相対主義であり、制約なき自然主義的成長のモデルは、完全性を備えた道徳性のビジョンを与え得ないといわれている⁷⁾。

こうした一連の批判は共通して、「何に向けての成長か?」「成長の基準は何か?」という問いをデューイの成長概念に突きつける。その根底には、不確実性と価値の相対化への恐れと、成長の確実な保証への希求がある。

(2) ヘーゲルからダーウィンへ

齋藤(2000)⁸⁾によれば、デューイの成長概念は、ヘーゲルの絶対主義を経た後、ダーウィンの進化論的自然主義とウィリアム・ジェームズの機能主義心理学の多大な影響のもとに形成された。この思想転換の道筋に、デューイの自然主義的成長観の葛藤が孕まれている。以下では、デューイの思想変容とその道程で背負った課題について、齋藤の議論に従ってまとめてみたい。

デューイは当初、二元論克服の契機をヘーゲルの絶対主義に見出していたが、1890年代後半にはそれと決別することになる。そして、環境との相互作用の中で目的的活動に従事する有機体という進化論的自然主義と、有機体の精神的、身体的活動を環境との相互作用における機能として説明する、ジェームズの機能主義心理学とをその哲学的基盤とするにいたった。理想的自己の実現というヘーゲルの思想からの離脱は、究極的到達点を放棄し、動きの中で自己を実現しつつける成長観への転換を意味するものであった。

デューイの思想転換の背景には、偶発的・創発的進化論があった。彼がダーウィンの影響に関して述べた論文「ダーウィンの哲学への影響」(1909)⁹⁾によれば、ダーウィンの思想は、西欧哲学科学史をギリシャ哲学以来支配してきた「絶対的な起源」と「絶対的な究極性」という形而上学を根源から覆し、「究極的目的性」を打破し、自然の可変性、経験の固有性、具体的諸目的と個別的知性という問題へと問いを転換するものであった(p.7-11)。

以上のように、成長のための成長観は、ヘーゲルの絶対主義から、ダーウィンの進化論的自然主義、ジェームズの機能主義への、デューイ自身の思想変容と自己超克の歩みを背負って形成されたものである。

しかしながら、このヘーゲルからダーウィンへの思想漂流の過程で、デューイの成長観は一つの課題を背負うことになる。デューイ自身が認め、また諸研究者が共通して指摘しているように、哲学的立場を絶対主義から実験主義へと移行させた後も、デューイの思想にはヘーゲルの残滓が見られる。デューイは、究極的な価値や目的という概念は放棄したものの、連続性や全体性や発達という発想を捨てなかったし、生が価値あるものであり、理想を追求してゆくことによってよりよくなっていくものだという信仰を失わなかったのである¹⁰⁾。

デューイがヘーゲル主義時代に形成した、自己実現と共同体の善の調和という民主主義の理想的ビジョンが自然主義に移行した後も残り続けたとするなら、そのビジョンはどのようにして設定されるのだろうか。デューイの成長観は、究極的到達点を放棄し、可変的な自然観と進化論的、機能主義的自然主義に与した上で、なおかつヘーゲルの要素とも言える理想性、方向性、意味志向性の根拠をいかに説明しうるのだろうか。単なる変化のための変化、動きのための動き以上の意味を持つものとして、人間の豊かな生の軌跡としての成長の理想性、方向性、善し悪しの基準といった概念をいかにして提示しうるのだろうか。こうした難題を、デューイはヘーゲルからダーウィンへの移行の過程で、引き受けることになったのである。

(3) 目的概念の再構築

究極的な到達点を取り去ってなお、成長のための成長に理想性、方向性、意味志向性を付与する鍵は、デューイの自然主義の内に見出すことができる。それは、科学的知性の手法や適応のための目的達成行為というメタファーによって特徴づけられるが、しかしそれだけではとらえきれない豊かな側面を持っている。

変化と成長に基盤を置くデューイの自然主義の内実は、1で述べたように、習慣の再構築のメカニズム

にあった。そのメカニズムは、獲得されゆく新奇さとしての衝動の動きを知性が方向づけていくことによって、外的環境に適応しながら個性を発揮し、新たな習慣を再構築していくというものである。こうしたメカニズムがデューイの述べる成長のための成長というプロセスの内実であり、可変的自然観の含意するものである。

それではこの新たな世界観において、固定された究極的到達点を否定してなお創出される成長の方向性は、いったいどこに向かうと考えればいいのか。これに対してデューイは、「終わり」と同時に「目的」をも意味する英語の“end”という概念そのものを再構築し、もうひとつの目的論とも言えるものを提示する。それは、究極的な完成状態としての最高善に向けて上昇し、やがてはそこへ到達、安住するという成長観に対する徹底した抵抗の思想であり、より可変的な自然の生のプロセスに忠実な新たな目的論である。

デューイは、手段を内に組み込む目的、行為の過程で暫定的目的として機能する手段という、連続的でホリスティックな目的—手段関係(ends-means relationship)を提示する。それは、「目的—手段」の連続的關係に基づく自然主義的な目的論である。自然の外に存する高位の目的と、下位なる自然の内に属して高位の目的に仕える手段という、序列的で二項対立的な目的と手段関係へのアンチテーゼである。目的と手段は形而上的な差異を持つものではなく、有機体と環境との相互作用の過程における機能的な区分であり、「同じ現実を表す二つの名称」である。この現実とは、行為の連鎖が形成していく過程であり、そこでは「すぐ次にくる行為」が行為の連続性と方向性を形成してゆく上で最も重要な役割を果たす。ここにおいて、目的はこの次なる行為の展望として機能する手段であり、逆に手段は、この身近な目的を形成してゆく今ここでの行為であり、「仮の目的」として機能する(HNC, pp.27-28; DE, p.113)。

こうして行為の連続的動き全体を背負い、手段を組み込む目的概念を、デューイは「展望的目的」(ends-in-view)と呼ぶ(EN, p.86; 88; HNC, p.155)。それは、中間的行為の連鎖の中から各瞬間ごとに創出され再構築されてゆく、行為の方向づけの「旋回軸」である(HNC, p.155)。目的と手段は、連鎖し循環しながら行為を進行させていくのである。

このような目的—手段の連続関係において、デューイは終わり=目的(end)概念を再構築する。「(到着した)港は、実のところ、新たな行為の様式の始まりである」(HNC, p.156)、「旅することは、たゆみなく到着しつづけることである」(HNC, p.195)という比喩的表現が示唆するように、ひとつの行為の達成が新たな始まりを生みつけ、終わることは始まることという循環関係を生み出す。

終わりを固定しないということは、終わりが存在しないということではなく、終わるということの意味自体を変容させる世界観の違いを意味している。終わり、そして目的は、一箇所に地点として存在しているのではなく、経験の流れ全体に遍在している(AE, p.63)。それは、直線の上昇志向の成長観から「永遠に循環する成長のサイクル」という循環的成長観への転換を含意している。そして、「手段は中間であり(Means are means.)、媒介的中间項である」(HNC, p.27)という表現が示すように、たえず経験の流れの直中において始まり、その中において終わりと始まりが循環の弧を連続的に発展的に形成していくのである。

このような自然主義的目的論に基づく成長観は、行為が収束するそのたびごとに新たな始まりに導かれてゆくという意味で、いわば一回毎の終結性をもつと同時に、現在進行形として今ここにある動きに最大の焦点を当てるものである。目的は究極的に達成されるものではなく、一つ一つの行為の中から「今達成される」(HNC, p.182)ものである。進歩を保証するものが先に待ち受けているのではなく、現在の再構築行為の中から進歩が生み出されるのである(HNC, p.195)。

(4) 基準の創出

デューイは目的概念を、今ここで行為の中からその都度創出されるものとしてとらえなおした。そうした創出は、究極的な到達点を持たないにも関わらず、単なる偶発性に陥ることなくある種の方向性を維持している。その方向性は、その都度の「より善さ」によって決められる。それでは、その「より善さ」の基準はどのようにして得られるのだろうか。

その際の基準は、科学的知性によって得られる。手段—目的の循環的な過程は、具体的には科学的知性

に基づく探究の過程として進められる。探究とは、次なる手段が定まらず活動が休止している状態を問題状況として構築し、反省と試行錯誤を経て、新たに展望的目的を形成する中で、その問題状況を解決してゆく過程である。「より善さ」の基準は、仮説の検証、試行錯誤の実験、問題の暫定的解決という科学的知性の手法に基づいて創出されていくのである。

このようにデューイの基準概念は、固定的で総括的な善悪のものさしとしてあらかじめ与えられる基準ではなく、固有の状況における具体的な行為のプロセスの中から随時形成されてゆく、改訂可能な「より善さ」、「発見される善」(HNC,p.194)なのである。それでは、この科学的知性によって改定されていく基準に「より善さ」の決定力を付与しているものは何なのだろうか。さらに分析を深めてみよう。

科学的知性が創出する基準を支えているものは何か。その一つ目の鍵は、科学的知性の土壌ともいえる習慣である。習慣は、知性の機能に自然が付与する制約である。習慣そのものは絶対的な善し悪しの基準とはなりえないが、知性の働く領域に境界を設定することで、「より善さ」を決してゆく上での支えと安定要因を与えるものなのである。

もうひとつの鍵は、衝動が感知する全体的ビジョンである。理想は、究極的彼方に確実な保証として存在するのではなく、全体的ビジョンとして行為の始まりにやってくる。デューイは、このビジョンが、経験の最初にやってくる「全体的で圧倒的な印象」として我々を直接的に捕らえるものであるとし(AE,p.150)¹¹⁾、そうした全体的印象が、経験のその後の諸相を通じて「基層」として残りつづけると述べる(AE,p.196)。たとえば芸術家や科学者の仕事は、こうした全体的な雰囲気(aura)に誘われて、その中で観察や反省が導かれ、道を模索しながら、漠然と予見される目的に向かって進んでいく(AE,p.80)。自然的事象の全体性の感覚が我々にもたらす理想性は、やがて達成されるべき目標ではなく、感受され、鑑賞される重要性である。そしてこうした理想の感覚は、「我々の生活の織物の中に編みこまれてゆく」という(HNC,p.180)。最初にやってくる全体的ビジョンは、予示的なものとしてある種の拠り所ではあるが、絶対的な保証を与えるものではない。刻一刻の行為の歩みにおけるその都度の目的形成の中で具現化されてゆくものである。そしてそうしたビジョンは、達成されたと思うと遠のいてゆく地平として行為を誘いつつ、その行為を通じて永遠に達成されつづけてゆく。

こうした全体的ビジョンを感知するのが、知性の原点ともいえる衝動である。衝動は、主客の未分化な経験の知覚的局面において、有機体が自然の生の全体性を受容させることを可能にする、いわば直接的な生の感覚の源である。科学的知性、反省的思考、行為などといったプラグマティズムの特徴的機能を、人間の経験の原初としての自然の全体性につなぎとめるものが、この衝動なのである。

このように衝動は、習慣の再構築において修正されつづけてゆく全体的な方向性をまず最初に感受し、それを行為の傾向性として表わしつづけてゆく。この方向性の感覚は、理想的ビジョンを最初に全体的につかむような、「現状に対する情動的反応、何か異なるものへの希望」(HNC,p.161)である。

ここにおいて衝動は、いまだ実現されていない可能性をビジョンとして予見するイマジネーションの働きにおいても必須の役割を果たす(CF,p.34;39)¹²⁾。衝動は、この新しいビジョンを前向きに投影し予示していくイマジネーションにおいて、可能性の領域へと行為を誘ってゆく「先駆者」である(CF,p.39)。デューイによれば、「イマジネーションは善の主要な道具である」(AE,p.350)。

生命の原初的全体性を背負う衝動は、より善さの方向性の感覚を、有機体の内側から開けてゆく展望として差し出すものであるといえよう。しかしながら、内的指標のみではより善さの基準は完成されない。習慣のうちでその意味が獲得されていくという性質を持つ衝動の動きは、より善くも悪くも転じうる可能性を秘めている。衝動が生み出す内的指標は、外界との相互交流の中で外界の事物や自然から「レジスタンス」受けて「客観的に実現され」てゆく(AE,p.84)。有機体が外界の事物、環境から受けるレジスタンスは、衝動の差し出す内的指標に客観性を与えてゆく契機としての指標といえる。より善さの基準は、内的指標と外的指標のダイナミックな交渉の内から客観性として創出され、発見されていくのである。

デューイの、循環する目的—手段概念、および現在進行形の成長概念は、今ここにおいて生起する行為を起点とすることによって、理想の意味、理想を追求すること自体の意味を再構築する。究極的到達点を固定しないデューイの成長のための成長観は、理想性、方向性、意味志向性、目的、終わりそのも

のを否定するのではなく、そうした諸概念の意味自体を、最初にやってくる理想的ビジョンと外的環境との相互作用、そして知性による目的の創出と達成の連続的循環としてとらえ直す。それは「何に向けての成長か」という問いの基盤である「何」(what)という礎志向そのものを覆し、「いかに」(how)、今ここにおける一つ一つの行為の中から、方向性や理想が形成されてゆくかというプロセスに力点をおく成長観として、問い自体を変容させるものなのである。

ヘーゲルとダーウィンの間でデューイが提起する成長のための成長概念は、「何に向けての成長か」という問い自体の根底にある、確実な保証を志向する世界観へのラディカルな挑戦である。それは絶対主義と相対主義の中間項という第三の世界観であり、その形成を可能にしたのが、習慣概念であった。習慣概念は、人間の内側と外側の相互作用として働くことで、絶対的価値を放棄しながらも、人間の成長に、理想の追求性、方向性、意味志向性を付与する。このようにしてデューイは、絶対主義と相対主義の間で抱えた難問を解消し、人間と世界をより豊かにとらえようとしたのである。

4. まとめ

以上で見てきたように、デューイの習慣概念は、衝動と知性という内的な働きを環境との相互作用によって外界に顕在化させることによって、内と外、精神と身体といった二元論を克服するものであった。そうした習慣概念を基底としてはじめて可能となる人間の自由と成長は、どちらも常に循環の中に、過程の中に置かれることによって、自由意志論と決定論、そして絶対主義と相対主義の間の対立を調停する試みでもあった。デューイの世界観は、中道を行くがゆえに批判の対象ともなりやすい。しかし、まさにこの中道にこそ、人間と社会、有機体と環境との間の複雑な相互作用の中で生きる人間の姿、さらには「より善く」生きるための手がかりを見つけないことができるのではないだろうか。

こうした豊かな自然主義に支えられる自由概念と成長概念は、デューイの民主主義の理想を支えるものでもある。ヘーゲルからダーウィンへの移行においても、自己実現と共同体の善を希求するデューイの民主主義の基本的な構図は揺らぐことは無かった。しかしそれを説明する基盤は、自然主義へと変容し、それに伴って、民主主義の理想性、理想を追求するというそのこと自体の概念も再構築されてゆく。

デューイの自然主義は進化論から強く影響を受けていることは先に述べたが、ここにおいて「進化」は、行く末を保証された楽観主義的で上昇的な進歩ではありえない。それは、古き調和の記憶と新しきものへの希望を手がかりに、不確実性の闇の領域が刻一刻と切り開かれていくような、「拡張する全体性」(AE,p.171)の動きである。彼のこうした「進化」観は、決して究極的礎、確実性の保証に屈しない反骨の精神、たえず生み出される逸脱と冒険と新しき創造の萌芽への寛容の精神の表われである。確実に頼りうる保証を拒絶する自然の生において人が自由であること、成長するということは、行為の最中に没頭する動きを通じてしか実感し、実現してゆくことができない。外的な権威に安息の知を求めることは、自然の生への背徳である。「幸福」(happiness)は、彼方に存在するものではなく「痛みと困難の最中において今達成されるもの」であり(HNC,p.182)、「平安」(peace)は、「行為の後ではなく最中」にしか求められないのである(HNC,p.181)。

<註>

- 1) John Dewey, *Human Nature and Conduct*, Henry Holt and Co., 1922.(以下本文中ではHNCと略記。)
- 2) John Dewey, *Democracy and Education* (1916), in *The Middle Works of John Dewey*, Vol.9, ed. Jo Ann Boydston (Carbondale:Southern Illinois University Press,1980), 58. (以下本文中ではDEと略記。またデューイ著作集(Southern Illinois University Press)については、これ以降” The Early Works” はEW,” The Middle Works” はMW,” The Later Works” はLWと記す。)
- 3) John Dewey, *Experience and Education*, New York: Macmillan Publishing Company, 1938. (以下本文中ではEEと略記。)
- 4) 魚津郁夫「デューイと『意志の自由』」熊本大学文学会編『文学部論叢』vol.34、1990、1-19頁。
- 5) John Dewey, *Philosophies of Freedom*, 1928, in *Philosophy and Civilization*, Minton, Balch and Co., 1931, p.282. (論文はpp.271-298.) (本文中ではPFと略記。)
- 6) John Dewey, *Experience and Nature*, (1925), LW, vol.1(1988).(本文中ではENと略記。)
- 7) ブーン (Randolph Bourne)、ボード (Boyd H. Bode)、カンデル (I.L.Kandel) らの議論を参照
- 8) 齋藤直子「終わりになき成長への挑戦——ヘーゲルとダーウィンの間のデューイ」『現代思想』2000、167-189頁。
- 9) John Dewey, *The Influence of Darwinism on Philosophy*, (1909), in MW, Vol.4 (1977).
- 10) cf.Scheffler,ibid.,195., Rockefeller,ibid.,217., 講義「アメリカプラグマティズムの再生」におけるバーンスタインの主張(Richard Bernstein, “Resurgence of American Pragmatism” (lecture at new School in New York. February 3,1999.))等を参照
- 11) John Dewey, *Art as Experience* (1934), in LW, Vol.10 (1987). (本文中ではAEと略記。)
- 12) John Dewey, *A Common Faith* (1934), in LW, Vol.9 (1986). (本文中ではCFと略記。)

Dewey's Concept of Habits

KOBAYASHI Sayaka

According to Dewey, man reconstructs the experience of an individual, and further, attempts to reform society by inquiry and co-operation. In this way, Dewey depicted clearly how man lives by interacting with the environment. On the other hand, however, his philosophy has been exposed to criticism that his thinking is too optimistic or that it only shows a relativistic approach without indicating the purpose. To such a criticism, counter-criticism has been made in the move to reappraise the philosophy of Dewey which has continued till today since the 1980s.

Is Dewey's philosophy really optimistic? Truly relativistic? If so, in what do such characteristics originate? This paper attempts to analyze these questions centering on Dewey's concept of habits as the main subject about. According to Dewey, habits not only builds an individual but also function as medium for individuals to reform society. His concept of habits contains both the problem of optimism and the problem of goal-setting in social reform. Therefore, Dewey's concept of habits enables us to approach the feature of his philosophy.